

# 縄文後晩期の岩偶岩版類について

—東海地域の事例を中心に—

● 川添和暁

本稿では、東海地域の資料を中心に、関西地域の資料をも含めて、確認できた岩偶岩版類について集成・分析を行った。岩偶岩版類を、断面形状から板状のものと非板状のものに分け、板状を13類型に、非板状を4類型に分類できるとした。これらは縄文時代後期中葉から晩期末までに認められるが、後期中葉から晩期初頭中心の伊勢湾西岸域と後期末から晩期末までの伊勢湾東岸域との様相の差を指摘し、後期岩版類や分銅形土偶、および南九州域の影響を受けた伊勢湾西岸域の様相から、やや東海地域の独自色を出した伊勢湾東岸域の様相へと変遷して行くと考えた。また、岩偶岩版類と線刻礫、および石錘と言われているものの一部にも有機的関係を示すと考えられるものが存在する可能性を指摘した。

## はじめに

縄文時代にはさまざまな精神性を示す遺物が知られており、これまでの研究では石製の人形を模したのものとして、岩偶あるいは岩版という器種名が認められている。東北・関東地域の資料が古くからよく知られていたが、近年、その他の地域でも同様な資料の存在が確認されており、列島的な規模での比較・検討も可能となってきた。

本稿では、東海・関西地域の資料にもとに検討・分析を行い、関連資料との比較を通じて、東海地域での様相を明らかにすることを目的とする。但し、本稿では資料紹介を中心に行ない、考察はごく若干に留めておく。

なお、後で述べるように、東海地域におけるこの類の資料の多くは、岩版という器種名が該当するものとも考えられる。しかし、中には岩偶というべき資料も存在しており、かつこれらは一連の資料として関連づけて検討すべきとの立場から、本稿では岩偶岩版類として一括して呼称する。

## 研究小史

ここでは、後期後半以降の岩偶・岩版とした資料に関する研究を概観する。

## A. 関東・東北地域の縄文晩期岩版・岩偶研究

土版について最初に取り上げたのは、E.S.Morseである(Morse1879)が、岩版について最初に報告したのは、東京都下沼部貝塚出土資料を石盤とした鳥居龍蔵・内山九三郎である(鳥居・内山1893)。複数の資料の分析・考察などに言及したのは大野延太郎が最初である(大野1897・1898・1901・1918)。大野は、東北地域・関東地域の土偶・土版と東北地域の岩版を取り上げ、土版と岩盤とは形状上土偶の退化したものであるとし、土偶・土版・岩盤は系統的関係があるとした(大野1898、同1901:412~413頁)。

池上啓介は、東北・関東地域出土の土版・岩版について、土版・岩版ごとにA型(形態楕円形)・B(形態四角形)・C(人面形)の3型式に分類した(池上1933:44~46頁)。空間的な分布と帰属時期についての言及もあり、関東地方では大森式土器文化、東北地方では亀ヶ岡土器文化に属する遺跡での発見とした(同:53頁)。

中谷治宇二郎は、土偶との関連で土版について言及し、土偶の退化ということのみならず本来土版として発したものがあっても想定し、岩版は土版の型を白堊質の石材に移したものとした。また、岩偶については土偶の型を石材に移したものとした(中谷1943:380頁)。

江坂輝彌は、岩偶と岩版とを区別・整理して

集成と論考を行なった（江坂 1960）。岩偶では縄文時代前期末から中期初頭の円筒下層式、奥羽北部の縄文時代晩期、九州の縄文時代後期の事例を提示した（同：180 頁）。これが岩偶の特徴を詳細にまとめた初めての論であり、ここに挙げられている一群に対して、以降、岩偶という呼称で呼ばれるようになった。岩版は前期中葉に類似のものがあるが、その他は晩期であるとした上で、平面形態・目の装飾および文様によって第一類から第十一類に分類した。関東地域の土版（帰属を大洞 C1 併行期と明示）と東北地域の岩版との関係については、より古い晩期初頭の岩版の存在を提示した上で、同一目的の土版が岩版の代わりにつくられたという見解を出した（同：209 頁）。

天羽利夫は、岩版が土偶と無関係に発生したとする芹沢長介の提言を受け（芹沢 1960）、岩版と土版との関係に注目した（天羽 1964）。編年を行なう上で文様にに基づく型式分類を行なっているが、東北地方で第一類から第六類、関東地方で A 類・B 類と、地域別の分類を行ない、土器の文様との対比から各分類別に時期比定を行なったことは注目できよう。大洞 B 式土器に対比させた第一類（岩版のみ）を初現形態であるとした上で、第一類から第六類の分布の中心が馬淵川流域で、かつ A・B は関東化した現象と捉えることで、土版・岩版の分布は亀ヶ岡文化圏および亀ヶ岡文化の波及した地域であるとした（同：88 頁）。

小林達雄は、形式（フォーム）・型式（タイプ）・様式（スタイル）の概念を明確化することによって、土版・岩版研究の整理を試みた（小林 1967）。特に、上述した天野の分類については様式に当たるとして、さまざまなバラエティーに対して型式分類を行なわなかったことを問題にした（同：5 頁）。小林の型式は、その社会集団全員が好ましいと考える信念に基づいてあらゆる行動を規制し典型的な行動を決定してゆく中で、形式を実体化する過程で形成されるイメージ（範型）とそれに対する模倣型との関係で把握できる概念であり、土版・岩版についてもこの研究方向の必要性を論じた。

鷹野光行は、関東地域の土版について分類の整理と時期比定を行なった（鷹野 1977）。分類

は、天羽の文様による分類成果を継承し、天羽の A 類を I～V 類に、同じく B 類を I～V 類に細分し、新たに細分類 I 類・II 類を含む C 類を設定した。

横山勝栄は新潟北部能登遺跡・南中上野遺跡・駒山遺跡出土の土版・岩版を取り上げ、亀ヶ岡文化の中の土版・岩版は初期の段階から各々の在地社会において製作され、時期的推移とともに形態進展され終末に至るという在り方を示した（横山 1980：174 頁）。

鈴木克彦は、青森県立郷土館風韻堂コレクション所蔵資料の整理・報告を行うに際して、岩版・土版の分析・検討を行った（鈴木 1980）。この論考の大きな特徴は、製作・石材・形態・施文と文様・用途と、遺物の変遷を各段階別に捉えたところであり、特に用途に関しては欠損のみならず、火熱・朱塗りやタール付着・有孔の存在・側縁の磨滅など、各資料でさまざまな痕跡が認められることを初めて問題提議したところにある（同：87～88 頁）。また、これまでの晩期の該当資料のみならず、それ以前の資料についても縄文時代の中で通史的に捉え、各時期での型式を理解する必要があるとした。

小杉康は、土版・岩版の垂孔のないものについてタブレット B と呼称した（小杉 1986）。平面形態・文様の分析を表裏面で行ない、タブレット B では東北地域では 37 タイプを、関東地域では 24 タイプを設定し、各タイプの編年および系統的な組列を提示した。この論では、鈴木の提言した、製作後の変形行為について整理・発展させた点が、大いに注目できる。変形行為には、線刻・敲打・回転穿孔・打ち欠き・ナヅリ・加熱・打ち割りがあるとして、製作行為と各変形行為を順に整理し形態上の特徴を考慮することによって行動系が復元でき、これを連続的な儀礼行為に相当すると仮定した（同：67～68 頁）。

また小杉は、福島県いわき市薄磯貝塚発掘調査報告書で、この論に沿った報告・分類を行なった（小杉 1988）。従来は線刻礫・石製品・岩偶などと称されていた、いわば典型的でないが関連性のある資料が同時に多く存在しており、典型的あるいはそれに準じる石製タブレットを第 I 群、境界領域に属する一群を第 II 群、範疇

外の一群を第 III 類、未加工の一群を第 IV 類とし、同様に分析対象とした。

稲野彰子は土版・岩版について数多くの研究・提言を行なっている。関東地域の岩版・土版については、土偶および石剣・石棒類に用いられる文様について重視した（稲野彰 1982）。また、岩版を概説する中で、岩版と土版とは異材同形態で同一機能をもつものとして岩版から土版への移行を指摘し、早い時期からの移行のある北上川流域など太平洋側の河川流域と、岩版を遅くまでつくり続けた日本海側の河川の流域との差を指摘し、亀ヶ岡文化圏における地域性を示すとした（稲野彰 1983a:111 頁）。また、小林・小杉が岩版・土版の最古のグループとした宮城県沼津貝塚の事例をはじめ、宮城県里浜貝塚、新潟県元屋敷遺跡、富山県桜町遺跡の事例を取りあげ、これらの一群が厚みを持ち、身体的意匠があり打割を除いて著しい変形行為は認められないことから、天羽の岩版第一類とは別系統と考えられるとした（稲野彰 2004:106 頁）。

稲野裕介は、亀ヶ岡文化における岩偶を取り上げ、馬淵川流域での中心と、津軽地域・北上川上流域や秋田県域などの分布の周辺の様相という構図を示した（稲野裕 1983）。また、増加した東北地域の資料との比較検討から、岩偶における地域差を詳細にした（稲野裕 1998）。馬淵川流域で認められる特徴的な資料について馬淵川型岩偶と呼称し、その他の岩偶を A 類（手足を明瞭に作り出すもの）、B 類（手足の作り出しがあいまいなもの）に分け、馬淵川流域、青森県西部、秋田県・山形県、北上川中流域・宮城県地方ではそれぞれ分布の様相が異なることを指摘した（同:77 頁）。また、小杉や金子（金子 2001）の論を受け、馬淵川型岩偶における改変と変形行為について言及したが、土偶や石剣類と同様な故意の破壊であり、岩版・土版などでの一連の変形行為は観察できず、これらとは一線を画するものとした（稲野裕 2007:59 頁）。

渡辺誠は、青森県石亀遺跡の調査報告を行う際に、岩偶について集成・考察を加えた（渡辺編 1997）。岩偶は石素材であるため、土偶と異なり切断や破壊の痕跡が極めて顕著に残ってい

るとして学史的役割が高いとした。また、岩偶の土偶との違いについては石材の白い色という点を指摘した（同:189 頁）。

斎藤和子は、青森・岩手・秋田県の亀ヶ岡文化期の岩版・土版を対象として、正中線など身体表現に注目し、表裏の概念を用いて土偶との関連性を論じた（斎藤 2001）。天羽が分類した、東北地方の土版・岩版の第 1 類から第 6 類は、大きく I（第 1 類）、II（第 2・3・4 類）、III（第 5・6 類）に大別できるとし、II では正中線による表裏や目・口表現を持つものが多く、これら人体意匠としての岩版・土版は、岩木川流域にその原形が求められるのではないのかとした（同:75 頁）。

## B. 南九州域の縄文後晩期岩偶研究

南九州域の軽石製の岩偶については、鹿児島県始良郡福山町小廻遺跡の資料について山崎五十磨が初めて石偶と称して報告した（山崎 1920）。1968 年から 73 年にかけて行なわれた鹿児島県南さつま市上加世田遺跡の調査で 10 点以上の資料が出土し、河口貞徳によって報告・分析が行なわれたことが、研究を多いに進展させたといえる（河口 1973 など）。河口の論で注目できる点の一つに、石棒との関連性に言及した点が挙げられる。近年、1995 年以降行なわれた鹿児島県垂水市柘原貝塚で、岩偶 64 点を含む大量の軽石製品が出土した。整理・報告を行った寒川朋枝によって、詳細な分析・検討が行われた（寒川 2001 など）。柘原貝塚資料について、形態別に法量を計測し、手に持ちやすい形とサイズという点に注目した（同:174 頁）。

## C. その他地域の縄文時代後晩期岩偶・岩版研究

古くは大野延太郎によっては石器時代の石製人形として下総国香取郡滑河町の事例と飛騨国の事例をも示した（大野 1900:352 頁）が、これを縄文時代の資料とすることに否定的見解が多い（中谷 1943:380 頁・江坂 1960:179 頁など）。

三重県松坂市天白遺跡の調査・報告で 10 点を超える岩偶岩版類および線刻礫などが知られるようになった。中村健二は、近畿地域におけ

## 分類

る縄文時代後期の土偶を考察する上で、天白遺跡の事例に加え、岩田遺跡・桑飼下遺跡・穴太遺跡などの岩版類との関係について言及した(中村 2000)。分銅形土偶の有文化について、岩版類が影響を与えた可能性を指摘したものである(同:186頁)。

大野淳也は、富山県小矢部市桜町出土の資料を岩版類と称して、後期後半から晩期の関連資料を列島規模で集成・検討した(大野 2007)。集成・検討資料には、大野は稲田裕介の馬淵川型岩偶以外の岩偶についても併せて関連資料として含めている。大野の論考の最大の特徴は、これまで東北・関東地域の資料で語られていたこの種の議論に対して、他地域の資料を明らかにしたことにより、亀ヶ岡文化圏中心の議論に対して新たな議論の展開を示唆したところにある。桜町遺跡で確認できた A から E 類に加えて、集成の結果認定した F・G 類の計 7 類に分類し、各類別の分布状況と時期比定を行ない、類によっては後期後半以降から存在することを明らかにした。

以上のように、これまでの研究主体は、関東・東北地域であり、特に亀ヶ岡式文化およびそれに関連する遺物として取り上げられてきた経緯がある。岩版と土版との関係、および土偶との関係についても、関東・東北地域の中で完結した議論が行なわれていたといえよう。中村健二や大野淳也の議論は、これまでの範囲にはとらわれない可能性を示すもので、特に日本列島の集成・検討を行った大野の論考は、極めて注目に値するものである。また、東北地域の縄文時代晩期では江坂以来、岩偶と岩版は明確に区別して論じられているが、稲野のいう馬淵川型岩偶以外は、この区別が明瞭ではないと考えられる。

鈴木・小杉の提唱した製作後の変形行為も、ここ 20 年来の研究で各人が意識して検討するようになった事柄であり、新たな視点として議論の深化が望まれる。特に、鈴木論は、素材から製作・使用・廃棄の状況を順追って検討した数少ない論考であり、基本的な資料検討の方向性がここにある。本稿もこの点を意識して議論を進めたい。

本稿では、人形を模した石製品を一括して論ずることで、これまで呼称されていた器種としての岩偶岩版類を再検討したいと考えている。従って、これまでの岩偶および岩版という器種名は一旦保留し、別の分類名称を用いる。

分析対象資料を一瞥すると、立体的な効果が表現されている一群とそれのない一群とがあり、これを分類基準の基礎とする。両者の区別は側面観および断面形状によって行ない、平面側(表面・裏面の両面、あるいはいずれか一面)の全体が平坦であるものを板状、平面側の全体および一部でも立体的構造を有するものを非板状とする。

板状は、平面形状および沈線(線刻)など、人形の表現方法から次の A～D の 4 群に分類できる(図 1)。

**板状 A 類:** 側面の抉りで表現されているもの。頭部のみならず手・足の表現が顕著な一群(板状 A-1 類)、頭部のみが顕著に認められる一群(板状 A-2 類)、側面周囲に連続した刻みが認められる一群(板状 A-3 類)に、さらに分類できる。

**板状 B 類:** 平面の沈線(線刻)で表現されており、正中線といわれる、平面の長軸方向に沈線(線刻)が施されているもの。平面形態が楕円形状を呈し、外反する 2 弧線が描かれているもの(板状 B-1 類)、同じく台形状を呈し、外反する 2 弧線が描かれているもの(板状 B-2 類)、同じく分銅形を呈し、器面中央に向って斜行する直線で文様が構成されているもの(板状 B-3 類)、平面形態が楕円形状を呈し、横方向に直交する短沈線が認められるもの(板状 B-4 類)に分けられる。

**板状 C 類:** 平面の沈線(線刻)で表現されており、正中線といわれる、長軸方向の沈線(線刻)が施されていないもの。平面形態が楕円形および隅丸形状を呈するもの(板状 C-1 類)、横方向の沈線に三叉文状の線刻あるいは彫去が認められるもの(板状 C-2 類)、平面形状ヒサゴ形を呈し、直線・弧線で文様が構成されているもの(板状 C-3 類)、平面形状が長胴な楕円

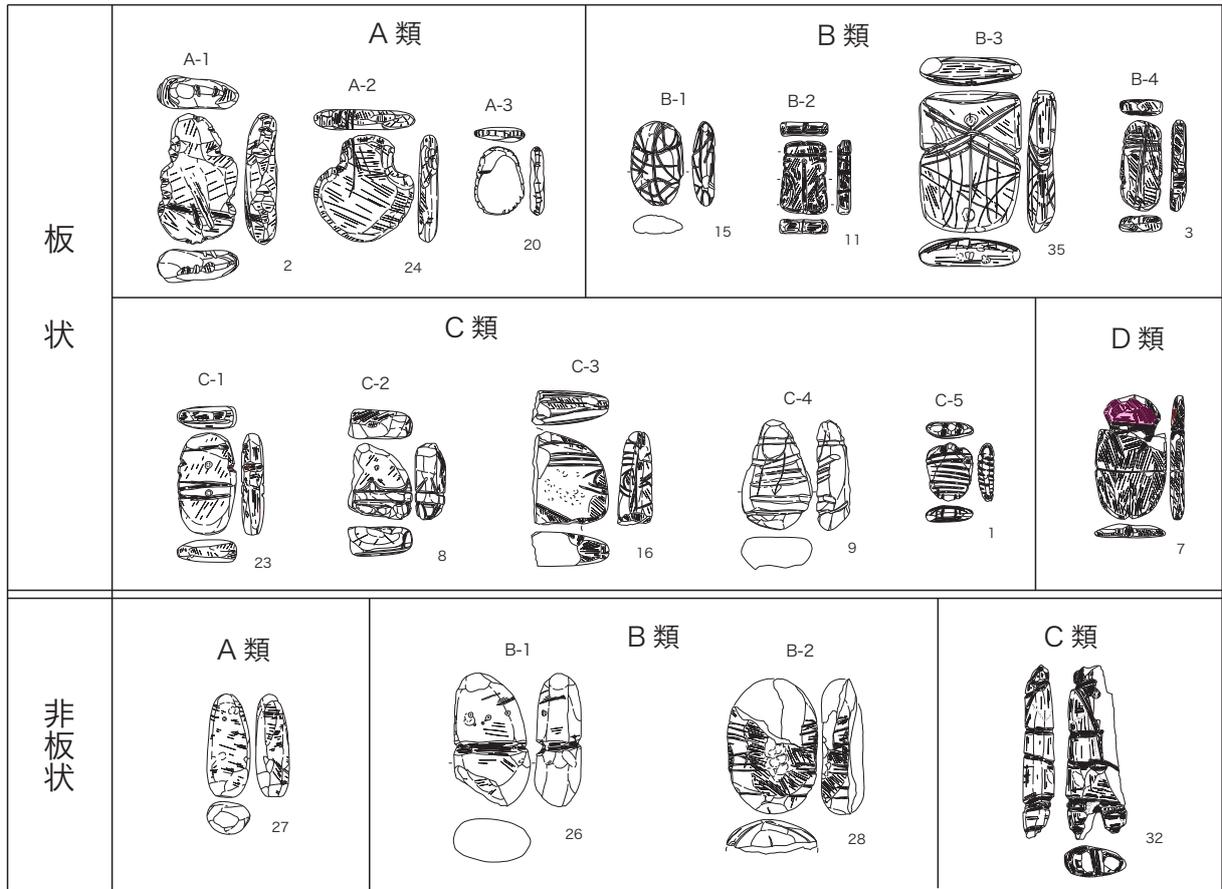


図1 東海・関西地域における岩偶岩版類分類図

表1 東海・関西地域における岩偶岩版類出土数一覧表（遺跡番号は図2に一致）

番号	遺跡名	所在地	時期	板状												非板状				不明	文献など	備考
				A-1	A-2	A-3	B-1	B-2	B-3	B-4	C-1	C-2	C-3	C-4	C-5	D	A	B-1	B-2			
1	前山遺跡	静岡県浜松市	晩期前半												1						鈴木編1992	
2	中村遺跡	岐阜県中津川市	後期～晩期	1																	中田・篠原・住田1979	
3	久須田遺跡	岐阜県中津川市	後期中葉～晩期前半				1														河野ほか1991	
4	尾崎遺跡	岐阜県美濃加茂市	後期～晩期								1										齋藤・藤村ほか2002	
5	北裏遺跡	岐阜県可見市	晩期											2						大江・紅村1973		
6	牛牧遺跡	名古屋市守山区	後期末～晩期後葉												1					川添編2001		
7	大坪遺跡	愛知県瀬戸市	後期中葉～後葉																1	宮石1957	大型石版1	
8	中条貝塚	愛知県刈谷市	後期中葉～晩期?							1										齋藤ほか1968		
9	真宮遺跡	愛知県岡崎市	晩期前葉～後葉									1								齋藤2001		
10	東光寺遺跡	愛知県額田郡幸田町	晩期中葉											1						加藤編1993		
11	麻生田大橋遺跡	愛知県豊川市	晩期中葉～					1												安井編1991		
			晩期中葉～						1				2						前田編1993			
12	伊川津貝塚	愛知県田原市	後期末～晩期末																1	久永ほか1972	破片	
13	保美貝塚	愛知県田原市	晩期～				1													小林ほか1966		
晩期～										1	1						瀬美町郷土資料館1997					
14	天白遺跡	三重県松阪市	後期中葉～晩期初頭	2	2	1		1			2									森川編1995		
15	下沖遺跡	三重県松阪市	後期中葉～晩期初頭								2									和氣2000		
16	片野殿垣内遺跡	三重県多気郡多気町	後期～晩期				1													田村・大下2001		
17	佐八藤波遺跡	三重県伊勢市	後期～晩期							1									1	岩中1991	豆谷・田村表採品	
18	穴太遺跡	滋賀県大津市	後期後半								1									仲川編1997		
19	桑飼下遺跡	京都府舞鶴市	後期中葉									1								渡辺編1975		

形および水滴状を呈するもの（板状C-4類）、  
 上部に長軸方向に短沈線が施されているもの  
 （板状C-5類）に分類できる。

板状D類：側面の抉りと平面の沈線（線刻）  
 で表現されているもの。

また、非板状については、A～Cの三群に

分類する。

非板状A類：断面形状が円形を呈し、横方  
 向に沈線（線刻）が認められるもの。

非板状B類：断面形状が楕円形を呈し、横  
 方向に沈線（線刻）が認められるもの。

非板状C類：断面形状がやや角張った楕円

形を呈し、横方向と斜方向に沈線（線刻）が認められるもの。

### 出土状況（時期・地域）

今回、東海・関西地域では21遺跡、35点を集成し、33点の資料を確認した（図2・表1）。静岡県で1遺跡1点、岐阜県で4遺跡5点、愛知県で8遺跡13点、三重県で4遺跡17点、滋賀県で1遺跡1点、京都府で1遺跡1点となっており、愛知県・三重県域で多く確認できている。特に天白遺跡の12点は今回の対象地域内では1遺跡内での出土点数が最も多い。岩偶岩版類を出土する遺跡形成の時期は、縄文時代晩期が多いものの、中条貝塚・穴太遺跡・桑飼下遺跡のように縄文時代後期中葉が主体の遺跡、天白遺跡・下沖遺跡のように縄文時代後期中葉から後期末が主体の遺跡もある。

次に、分類別に概観する。第1に注目できる点は、板状A類・板状B-3類・板状C-1類・非板状が縄文時代後期後半に属するものが圧倒的に多く、非板状の事例は天白遺跡・佐八藤波遺跡に限られる点である。第2点目は、本稿で16類型に分類したうち、天白遺跡で8の類型が認められる点である。第3点目は、板状B-2類・板状C-4類・板状C-5類・板状D類が縄文時代晩期にのみ認められる点である。

また、出土遺跡の種類について言及する。貝層の形成が認められる遺跡としては、中条貝塚・伊川津貝塚・保美貝塚が挙げられるが、その他は貝層形成が認められない遺跡からの出土である。天白遺跡・下沖遺跡は、配石遺構が検出されている遺跡である。北裏遺跡・牛牧遺跡・真宮遺跡・麻生田大橋遺跡は、多量の遺物を包含する遺物包含層を有する遺跡であり、土器棺墓などの遺構が目立つが、遺跡内からは竪穴建物跡の検出も認められる場合もある。穴太遺跡では、河道には貯蔵穴、脇には竪穴建物跡・配石遺構が確認されており、打製石斧集積遺構も検出されている。桑飼下遺跡では建物に由来するとした炉跡48基が検出されており、集積状態をも含めて多量の打製石斧が出土している。

### 資料の分析

#### a. 石材

ここでは、石材<sup>\*</sup>と色調について言及する。使用石材は、大きく、砂岩・凝灰岩・結晶片岩などの片岩系の3種が認められる。最も多いのは砂岩である。凝灰岩製やその可能性のあるものは、6・11・12・17<sup>\*\*</sup>で、片岩系は9・10・13・14・32である。麻生田大橋遺跡では、砂岩製のものが確認できず、凝灰岩と片岩系の資料のみが確認できるのは注目できよう。

石材の色調については、黄白色・灰白色が圧倒的に多く、4・7のようにやや黒みの強い灰色も事例もある。このことから、白色を基調として石材の選択が行なわれた状況が窺われる。また、13・14のように深緑色を呈する事例もあるが、これは稀で、麻生田大橋遺跡でしか確認できない。

今回の集成では、一遺跡から複数点出土している事例として、北裏遺跡・麻生田大橋遺跡・保美貝塚・下沖遺跡・佐八藤波遺跡がある。北裏遺跡例（5・6）は同一類型のなかで、使用石材が異なる事例である。麻生田大橋遺跡例（11～14）は、緑色片岩製については同一類型に属するものである。天白遺跡例（18～28）は異なる類型のすべてが黄白色を呈した砂岩で同一石材が使用されているものである。下沖遺跡例（29・30）は同一類型で使用石材も同一のものである。保美貝塚例（15～17）と佐八藤波遺跡例（32・33）では、同一遺跡内の資料ではあるがそれぞれ類型が異なり使用石材も異なっている点が注目できる。

#### b. 法量

最大厚に関しては、幅に対する板状と非板状の二分類を行なっていることから、分類別に長さ・幅を分析することで法量を概観する（図7）。岩偶岩版類全体で見た場合、長さ2.5～14cm、幅0.8～8cmの範囲におさまっている

<sup>\*</sup> 石材名は、各報告書の記載や、堀木真美子（愛知県埋蔵文化財センター）の分析によるものもあるが、最終的な記載の責任は筆者にある。

<sup>\*\*</sup> 番号は、図3～6の遺物の番号を示す。

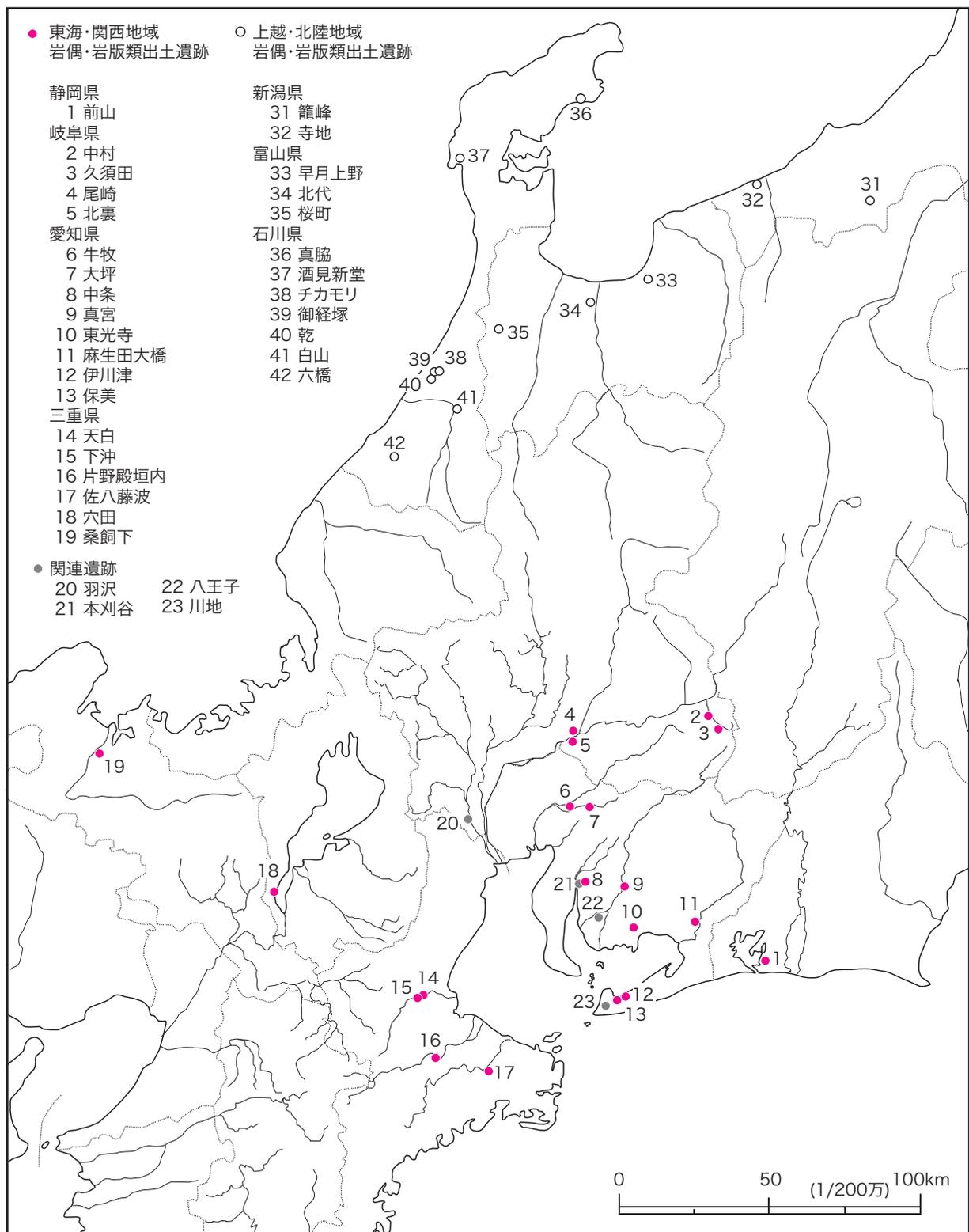


図2 東海・関西地域における岩偶岩版類出土遺跡位置図（上越・北陸地域は大野 2007 を参照）

が、類型別で見た場合、法量による群が認められるようである。板状A類・同B類は長さ8cm以上・幅6cm以上の一群と、長さ8cm

以下・幅5cm以下の一群に分けられ、いわば法量に大・小が存在しているようである。板状B類の長さ8cm以下・幅5cm以下の法量の小



図3 東海・関西地域出土 岩偶岩版類1

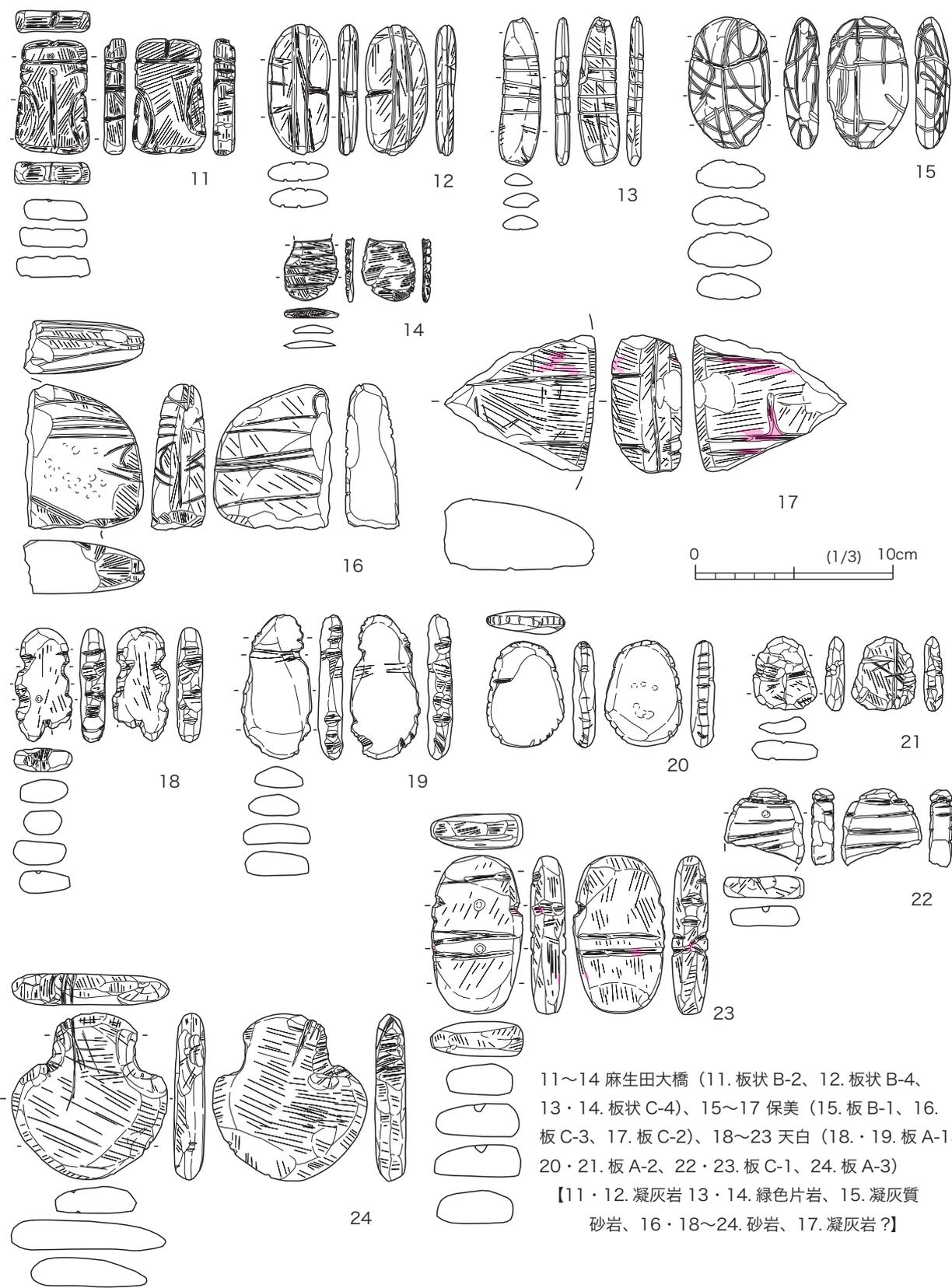
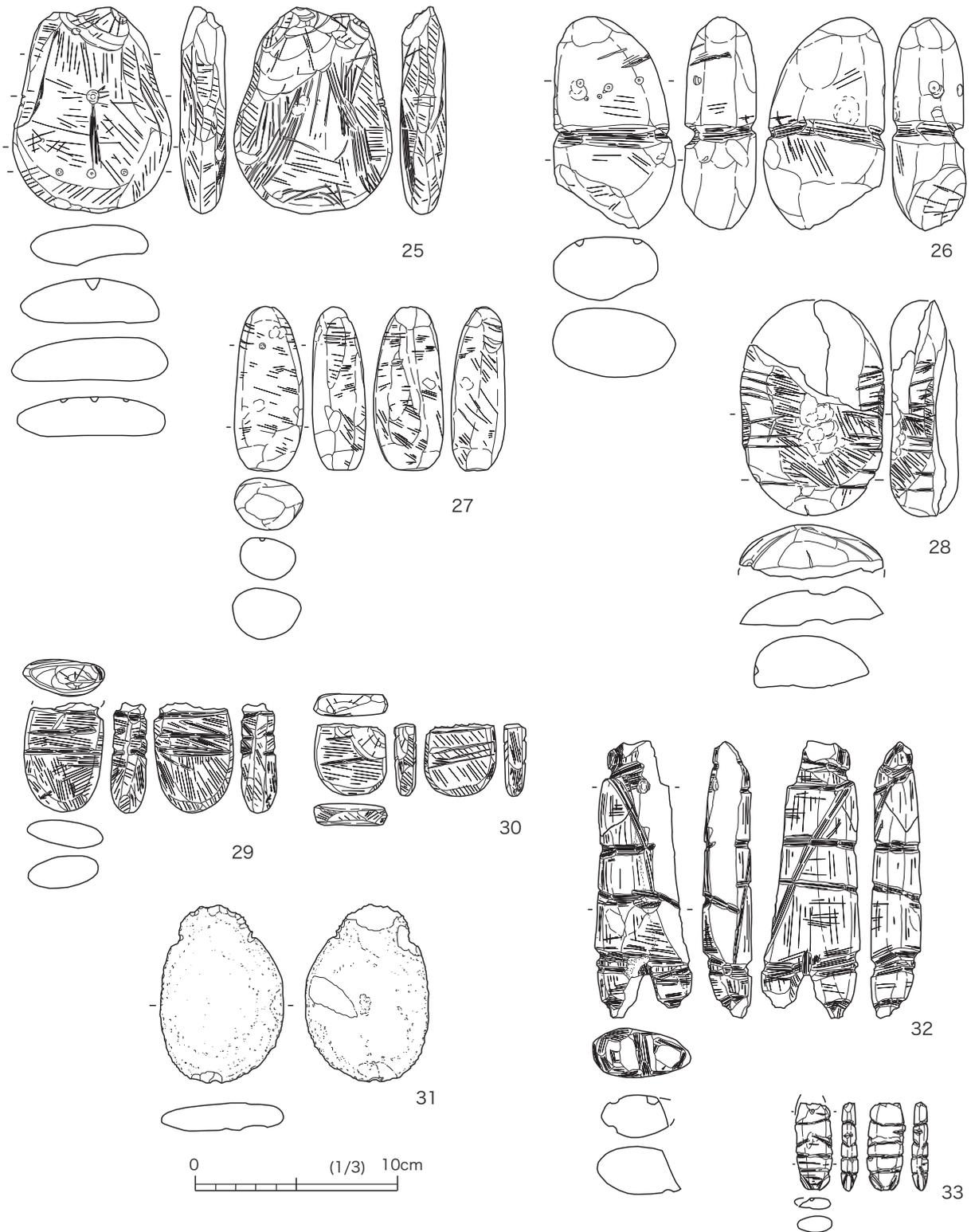


図4 東海・関西地域出土 岩偶岩版類2



25~28 天白 (25. 板 B-2、26. 非板 B-1、27. 非板 A、28. 非板 B-2)、29・30 下沖 (板 C-1)、31 片野殿垣内 (板 A-3)、  
 32・33 佐八藤波 (32. 非板 C、33. 板 C-1)  
 【25~31・33. 砂岩、32. 結晶片岩】

図5 東海・関西地域出土 岩偶岩版類3 (31のみ田村・大下 2001より引用)

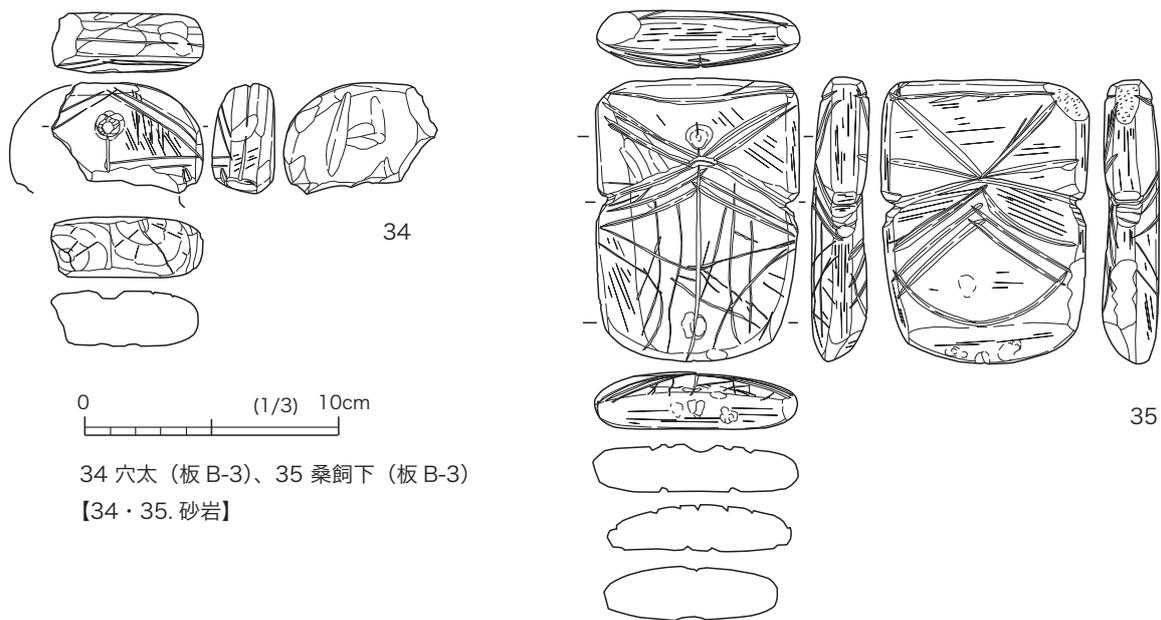


図6 東海・関西地域出土 岩偶岩版類4

さい一群は、いずれも縄文時代晩期の資料である。板材C類は長さ7cm以上で幅5cm程度の一群と幅3cm程度の一群、長さ5cm以下の一群の、計3群に分けられるか。板状D類は長さ5cm以下の一群と、10cm程度の一群、14cm程度の一群と3群に分けられる。これはそれぞれ、北裏遺跡(5・6)、牛牧遺跡(7)、東光寺遺跡(10)出土事例に対応する。非板状についても、長さ8.5cm・幅3.5cm程度のもの、長さ11cm・幅5cm以上のもの、長さ14cm以上で幅5cm程度のものの3群に分かれ、それぞれがA類・B類・C類に対応する。

以上のように、各類型で法量により、2あるいは3群に分類できようであり、B類のようにそれが帰属時期に対応していると考えられるものもある。上述した石材同様に、一遺跡から複数点出土している事例を概観する。下沖遺跡の事例は一端が欠損しており全体の法量は計り知れないものの、幅や形状からは29・30はそれほど法量に差はないと考えられる。従って、北裏遺跡の事例(5・6)と同様に、同一類型で同様の法量を有しているものが複数存在しているものと考えられる。麻生田大橋遺跡事例は、板状B-2類(11)・板状B-4類(12)・板状C-4類(13・14)と異なる類型のものが存在しているものの、長さが5～7.5cm程度と

法量が近似する傾向がある。一方、保美貝塚・天白遺跡・佐八藤波遺跡の事例は、異なる類型が認められ、かつ法量に著しい差が認められるものが存在するようである。

### c. 器形調整から変形まで

岩偶岩版類は、製作後に変形が加えられている事例が多い事情があり、製作痕のみを抽出することが難しいと考えられる。ここでは、各類型別に、器形自体を整える段階から、遺物として廃棄されるまでの、現状の器面に認められる製作・変形痕について、その種類と前後関係係数を検討する。

製作・変形の痕跡については、a. 研磨・磨痕、b. 擦込・擦切、c. 敲打・打割、d. 打込、e. 回転穿孔・盲孔、f. 被熱、g. 赤彩に整理できる。aからeについてのみ換言すれば、a. 研磨・磨痕は全面あるいは一部分が面的に方向をもって磨られている作用、b. 擦込・擦切は線状を呈する局所的に凹にする作用、c. 敲打・打割は打撃行為による作用、d. 器面に打撃などして凹みを形成する作用、e. 穿孔・盲孔は回転運動などによって点的に凹にする作用、である。沈線および線刻は、身体動作としてはb. 擦込・擦切と同じだと考えられるが、特に文様としての意図が認められるものについて、この名称で

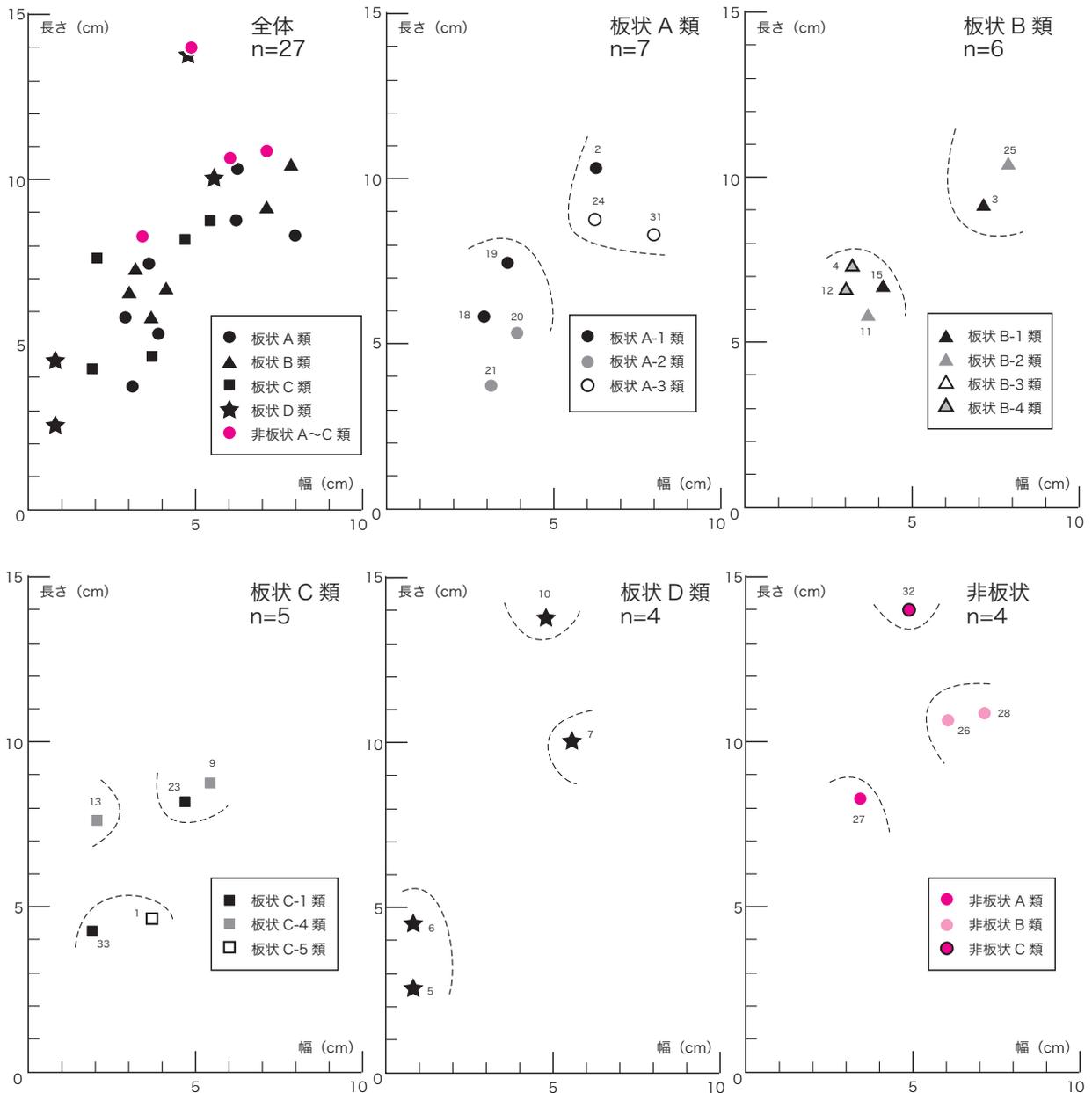


図7 東海・関西地域出土 岩偶岩版類 法量散布図

指摘するものとする。また、沈線は幅太く明瞭なもの、線刻は幅細く時には不明瞭なものを示すこととする。

**板状 A-1 類 (2・18・19)** 器形全体には全面研磨が施されているが、器形自体は、側辺部の擦込によって頭部・腕部・脚部の作り出しを行なっている。2は下部に横方向に幅広いが極浅い擦込が認められ、さらに長軸方向にも2条観察できる。被熱の可能性があると考えられる。18はヘソを表したと考えられる下腹部付近に盲孔が施されている。19にも同様の幅広

いが極浅い擦込が、上部横方向、頭部と胴部との境付近に観察できる。

**板状 A-2 類 (20・21)** 器形全体には全面研磨が施され、器形には側辺部の擦込が認められるものである。20は片面には横方向に沈線が施されていたようであるが、表面剥離のため詳細は不明である。赤色化しており、剥離も被熱による可能性が考えられる。21は縦方向あるいは横方向に沈線あるいは線刻が施されているが、端部の擦切を起点にして施されているようである。

板状 A-3 類 (24・31) 31 は実見できなかった資料であるため、24 のみについて言及する。24 は最終的には表面研磨により扁平カマボコ状の器形自体が形成されているが、敲打調整によってある程度の形状を作り出したようである。また、上端部の作り出しは、最終段階で敲打によって形成されており、部分的に研磨が施されている。上端部を中心に縦方向あるいは横方向に短沈線・線刻が施されている。また、下半部端部にも短線刻が2ヶ所施されている。これらもいずれも側辺の凹みや抉り入れを起点としている。

板状 B-1 類 (3・15) 器形自体の形成は最終的には全面研磨によると考えられる。3 はその後沈線・線刻が表裏に施されている。表面には弧線が三条認められるが、欠損状況から本来は四条で、二条一単位で外反する弧線を形成したものとも考えられる。裏面にも短線刻が認められる。また最後に打割行為が行なわれたものと考えられる。15 はやや上部に短軸方向に沈線が施され、それに直交する形で長軸方向にも沈線が、さらには外反する弧線も施されている。この四条のやや明瞭な沈線が施される間に、多くの線刻が施されているが、下端部にも外反する小さい弧線が施されており、33 と同様に脚部の表現かもしれない。

板状 B-2 類 (11・25) 11 は器形自体には最終調整として研磨が行なわれており、器面は平滑で、断面形状は扁平な長形状である。平面上部には2ヶ所の盲孔があり、縦方向の太い沈線が下の盲孔を起点として垂下している。外反する弧線は下半に施されており、また側辺には短沈線が認められ、平面側にまで伸びている部分がある。沈線は幅広くかつ深く明瞭なものである。25 は上端・器面中央および下端に盲孔が施されており、中央部分には盲孔を起点・終点として集合線刻が認められる。また、外反する弧線が表面には一条・裏面には集合線刻があり、表面には中央部に短軸方向に短線刻があり、裏面には下端には弧状の集合線刻がある。また、側辺にも短線刻が2条確認できる。その後、25 は上端部を連続敲打により裏面を中心に表面の剥落が認められる。

板状 B-3 類 (34・35) 器形自体の調整と

してはいずれも最終調整の研磨が認められるもので、ほぼ器形が出来上がった状態で側面に擦込を入れている。34 は表面に施されている沈線は細く斜方向および短軸方向については二条一単位となっている。打込によると考えられる盲孔が上端に施されており、ここを起点に一条の沈線が垂下している。また、上端部上面および側辺に長軸方向への沈線が認められる。裏面を中心に極浅い幅広ではあるが線状に擦込が認められ、その後器面に対して垂直方向に打割が行なわれている。35 は側面の擦込を起点に斜方向の太沈線を入れ、並行あるいは対向する形で直線的な集合沈線が認められる。打込によると考えられる盲孔は上下2ヶ所あり、これを結んで沈線が一条垂下する。その後、下半には線刻により縦横方向に集合沈線が施されており、下端には対向する弧線が認められる。また、左上端には敲打によると考えられるアバタ状の痕跡が認められる。

板状 B-4 類 (4・12) 器面調整は最終調整の研磨が認められる。4 は側面を擦込みが施され、それを起点に横方向に沈線が施されている。縦方向の沈線は、複数ある横方向の沈線の前後に施されている。一方、12 は縦方向の2条の沈線が先に施され、その後横方向の短沈線が施されたようである。12 にはさらに格子目状の線刻が認められる。二破片の接合資料であるが、被熱による剥落の可能性もある。

板状 C-1 類 (22・23・29・30・33) 器面調整はいずれも最終調整の研磨のみが認められる。22 は上端部溝状の深い凹みを形成することによって作り出しになっている。表裏および側面に横方向の沈線があり、上端に盲孔が一ヶ所認められる。その後、器形自体は打割により切断されている。23 も器面調整後に側面には擦込を入れ、表裏面ともに横方向の沈線が施されている。側面の擦込と横方向の沈線は重ならない。その後、赤色顔料の塗布があったものと考えられ、沈線に内に顔料の残存が認められる。29 は側面の擦込から平面に横方向の沈線が施されている部分と、平面のみに沈線が施されているものがある。特に一面では横方向の沈線の後に、斜方向にごく浅い並行沈線が施されたようである。また、器形自体は打割に

より切断されている。30 は表裏面に横方向の沈線が認められ、その後に器形自体が打割により切断されている。33 は平面側を中心に横方向に沈線が認められるものである。下端には脚部を表したと考えられる斜行する沈線が認められる。上端には盲孔が一ヶ所認められる。上端の欠失はその後を受けたものと考えられる。

**板状 C-2 類 (8・17)** 8 は研磨による器面調整後に沈線および彫去による三叉文および瘤状の装飾が認められるものである。表裏には細い盲孔が認められる。図面上端部には幅 1cm 弱の磨痕が同方向に連続して認められる。最後に器形自体を打割により切断しており、現資料は四分一程度の残存と考えられる。17 は研磨による器面調整後に沈線が施されている。沈線は横方向の沈線に縦方向の短沈線を結合させ、三叉文風の効果を表しているか。また、側面にも縦方向に沈線が認められるのが大きな特徴である。沈線施文後に器面全体に赤色顔料の塗布がある。これも最終的には打割による改変を受けており、部分のみの残存である。

**板状 C-3 (16)** 側面への擦込による挟り入れがあることで、器形全体がヒサゴ形を呈するものである。器面研磨後に平面には横方向を中心に複数条の沈線があり、側面の挟り入れから斜方向に伸びる沈線もある。また、側面および上面には縦方向にも沈線が認められる。これも打割による部分のみの残存である。色調の変化があり、被熱の可能性が考えられる。

**板状 C-4 (9・13・14)** 9 は器面の研磨調整痕は著しくない。上端部の沈線は一周し、作り出しの形成を行なったものと考えられる。器面には横方向に沈線が施されている。表面には剥落部分があり、敲打による作用かもしれない。13 は器面調整の研磨痕が認められる。横方向の沈線は五条並行して一周する。その後下半には長軸方向に線刻が施されている。14 も器面調整の研磨痕のあとに、横方向の沈線が少なくとも五条並行して認められる。

**板状 C-5 類 (1)** 1 は器面の研磨調整痕は著しくない。沈線は横方向と縦方向があるが横方向が先行するようである。横方向の沈線は平面全体に伸びているが、表・裏各面で横方向に沈線が施されているが、やや斜方向を呈する並

行沈線が施されたあとに水平方向に近い並行沈線が施されている。縦方向の沈線は短沈線で上端・下端で表裏を跨ぐように施されている。

**板状 D 類 (5～7・10)** 5～7 は器面調整の研磨痕が顕著に残されている。5 は横方向に一周する形で沈線が 2 条施され、その間には×字状の文様が刻まれている。6 は中央に挟りがある形状で、上下両端ともに扁平に薄くなる形状である。側面から平面にかけて斜方向に沈線が伸びており、中央で×字状の文様となる。また、中心に縦方向の短沈線が認められる。7 は扁平楕円形から一端部に幅広い擦込を行ない頭部の作り出しを行なっている。擦込によってできた挟り部分から表裏面ともに斜方向に幅広い沈線が入る。下端には短い擦込が入り、その上に擦痕が確認できる。中央には横方向に細い沈線が一周する。また、赤色顔料が表面頭部一帯にあり、蛍光 X 線分析の結果、ベンガラであることが明らかとなっている(川添編 2001)。10 は器面調整痕が不明瞭である。一端部に擦込を行ない頭部の作り出しを行なっている。D 類に関しては、打割による切断が認められないことが大きな特徴である。

**非板状 A 類 (27)** 器面調整の研磨痕が顕著に残されている。その後、上部に回転穿孔と考えられる盲孔が一ヶ所施され、それを挟み側面側には短沈線あるいは線刻が集合した状態で施されている。

**非板状 B 類 (26・28)** 26 は報告では独鉗状としているものである。器面研磨調整後に、器面中央に一周する形で幅広の沈線が施されている。また回転穿孔による盲孔が 5ヶ所に認められ、横方向の沈線付近には十字状の短沈線あるいは線刻が認められる。その後、一端には打割が認められ、若干の被熱による色調の変化がある。28 は平面形状楕円形状を呈するもので、側面には浅く・幅広の擦込が行なわれ、若干の面が形成されている。横方向の集合沈線が施されており、側面を含めて一周するものと考えられる。端部側面には回転穿孔による盲孔が一ヶ所認められる。器面中央には擦痕による平坦面の形成があり、さらに敲打などによる凹みの形成が認められる。全体に被熱が認められ、欠失もそれに伴うものかもしれない。

非板状C類(32) 器形の大まかな形成後、上部端の溝状の擦込による作り出しと下端部擦込により脚部が形成され、さらに上端部の作り出しには側面を溝状にした凸状の作り出しが認められる。横方向に一周する沈線が胴部と胴部と脚部との境にあり、肩部と考えられる作り出しの一端から斜方向に同様な沈線が一周すると考えられる。肩部と考えられる部分には、表裏両面につながり囲むような線刻が確認できる。また、作り出し根元部分には回転穿孔による盲孔の形成が認められる。器形全体は斜め方向に剥落が見られるが、その原因となる敲打痕などの痕跡は明瞭ではなかった。

その他 実見し得なかった伊川津貝塚例は、連弧文のような文様が彫られているとの報告がある(久永1972:139頁)。

以上のことから、大まかには全体の器面調整として研磨調整をし、沈線・線刻・穿孔・打ち込みなどが施されたようである。その後の様相には、敲打・擦痕のあとに最終的には打割のち廃棄されたものと、打割を経ることなく廃棄されたものがある。打割による大きな変形事例としては3・8・16・17・22・29・30と、以外に多くはない。28は被熱による割れと考えられ、32は打割によるかは不明である。また、沈線・線刻は一括して行なわれたものも一方で、様相の異なる沈線・線刻が複数段階にわたって行なわれているものも認められる。

#### g. 廃棄(埋納)について

今回扱っている資料の中で、出土状況について報告があるものは限られており、多くは遺物包含層中からの出土と考えられ、他遺物とともに出土していた状況のようである。敲打などによる破片資料について、接合関係が認められる事例は現在までのところ確認されていない。

特筆すべき事例のみを以下に記載する。牛牧遺跡例(7)は土器棺墓などを含む遺物包含層中から横位状態で出土したもので、この地点は石鏃が最も集中して出土した地点に当たる(川添2010b)。真宮遺跡例(9)はJ1住居跡床面から、大型の石皿2点とともに出土したと報告されている(斎藤2001:17頁)。桑飼下遺跡

例(35)は、包含層中にやや傾斜しているものの倒立した状況で出土した(渡辺編1975:384頁)。

### 関連資料について

#### a. 線刻礫

人形を形成していることは窺えられないものの、器面には線刻が描かれている資料に線刻礫がある。今回扱った遺跡では、天白遺跡で10例の出土が報告されているが、岩偶岩版類が出土していない遺跡では、滋賀県甲良町北落遺跡、奈良県五條市上鳥野遺跡<sup>\*</sup>がある。東海地域では、線刻礫のみが出土している遺跡は現在までのところ知られていない。

天白遺跡の事例(図8)で概観するならば、岩偶岩版類と同様の砂岩製で、平面形状が楕円形あるいは隅丸台形状を呈する扁平な板状の礫素材を用いているものが多く、一例のみ非板状を呈するものが認められる。器面の片面あるいは両面に認められ、単一線による線刻の場合と、幅1cmから2cmの間に複数条の擦痕状のものが集合している場合とがあり、同一器面に両者が共存している事例もある。円を描くものも一例のみある(37)。いずれの線刻も極めて細いものや浅いものである。これが、岩偶岩版類と同様の祭祀行為に伴う改変痕であるとするならば、岩偶岩版類に認められる同様の痕跡がある程度の形状を整えた後の変形行為痕として抽出できるものと考えられる。

#### b. 土版類

東北・関東地域では、岩版と関連づけて考えられている土版が知られているが、東海地域ではこの土版とは形状の異なる資料が知られている(図9)。本刈谷貝塚出土例(42)は、2分の1程度が残存しているもので、形状から岩偶岩版類の板状C類に相当するものと考えられる。当該時期の半截竹管文系条痕土器とは異なり、胎土の粒子が細かく、焼き締まりのある資料である。

下方側辺には2ヶ所に抉り入れが認められ、

<sup>\*</sup> 中村健二のご教示による。

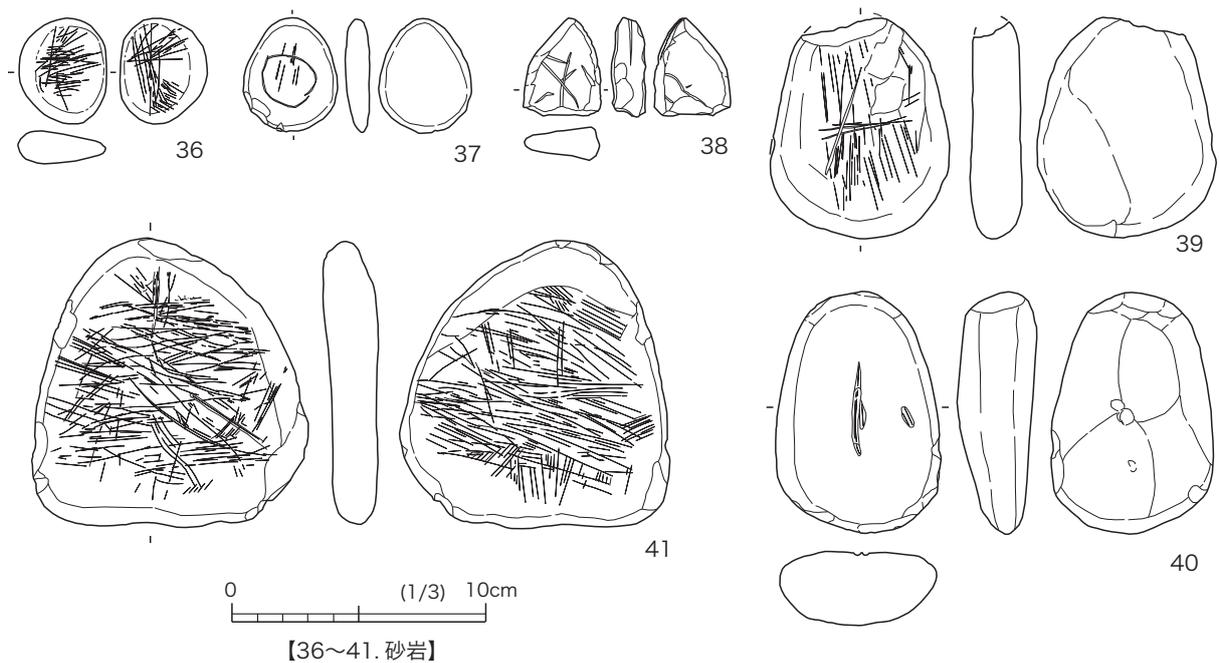


図8 天白遺跡出土線刻礫

いずれも焼成前に施されている。しかし、表面には縦・横・外反弧状の線刻が認められるが、これらはいずれも焼成後に施されている。横方向の線刻は、側辺の抉り入れを起点にしているようである。また、裏面には擦痕が各方向に認められ、これも焼成後に施されていると考えられる。最後に、一方向からの打割による切断が行なわれ、廃棄されたと考えられる。

この事例は、焼成前の製作状況と、焼成後に加えられた改変行為が別の段階として明瞭に区別できる点が重要である。この資料に関していえば、器形の成形と側面の刻みのみが焼成前に行なわれ、焼成後の改変行為により、線刻と磨痕とが残されたといえよう。

### c. 土偶

土偶との関連性については、後期分銅形土偶と岩版類との関連性が中村健二によって既に指摘されている（中村 2000）。中村は、時的併行関係および部分的文様の共通性などから、分銅形土偶の有文化には岩版類が影響を与えた可能性を指摘した（同：186 頁）。一方大野淳也は、西日本域で出土している岩版類について、長田友也の論を受けて（長田 2004）東日本地域の後期岩版類と西日本域の分銅形土偶との折衷したものとした（大野 2007：253 頁）。分銅形土偶に対して、後期中葉から後葉にかけて石素材への転換があり、かつ土偶とは異なる岩偶岩版類としての特徴を有する道具になったことは、言えるであろう。今回の集成で、この分銅形土偶に関連して注目できる新たな資料として、保美貝塚例がある。16 は平面形状がヒサゴ形を呈し、より分銅形土偶との関連性が指摘できるものである。上面端部および側面には長軸方向に沈線が認められるなど、この点も分銅形土偶にしばしば認められるものに近い。但し、16 は文様自体が弧線を中心に形成されており、文様の構成が大きく異なるものである。帰属時期がやや不明瞭なところがあるが、保美貝塚の形成時期の盛行が後期後葉以降からが主体となる

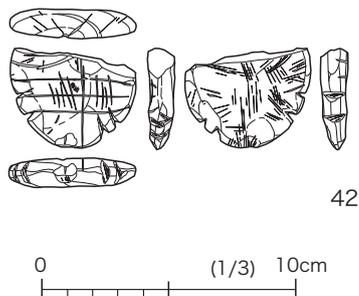
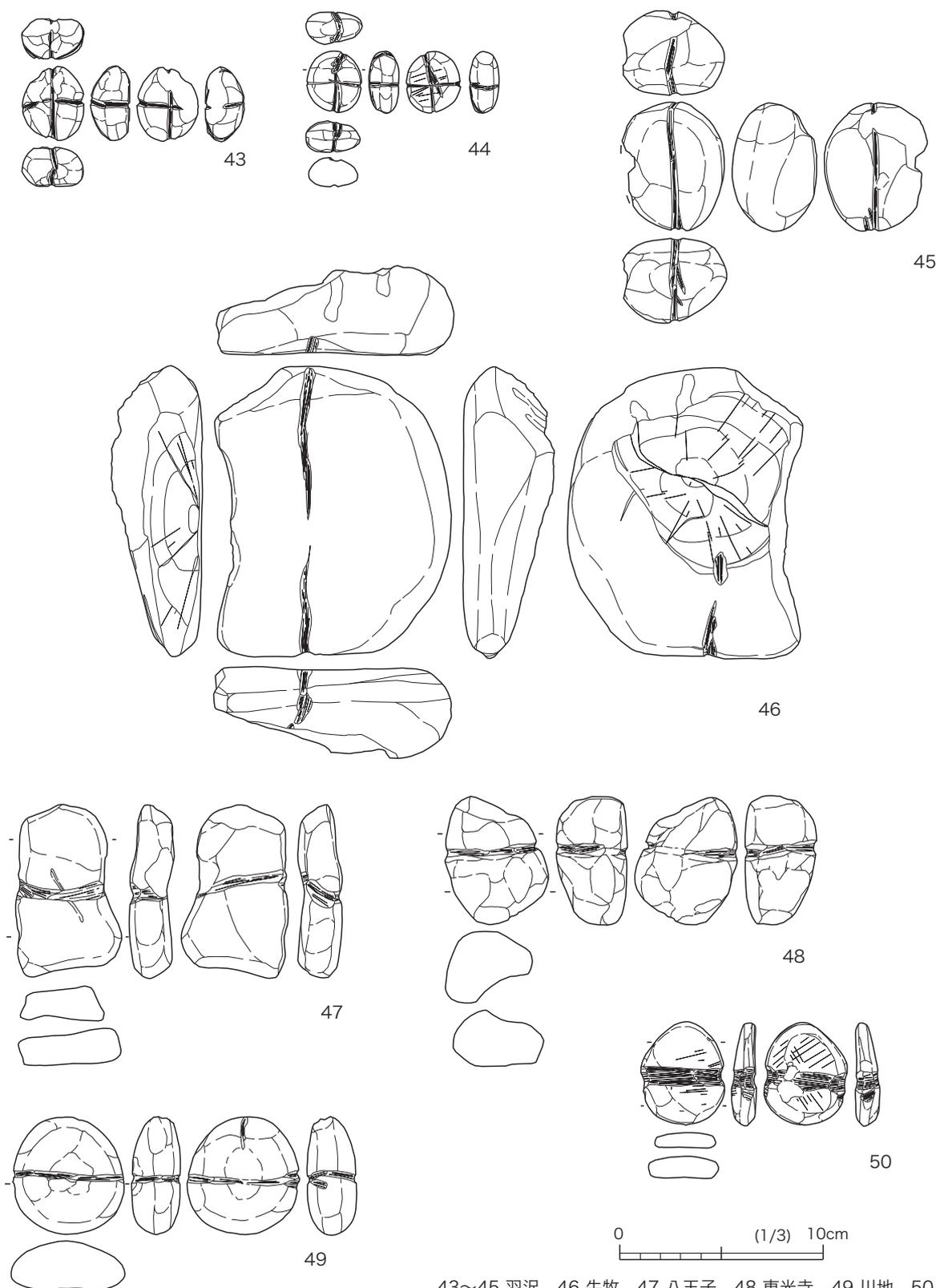


図9 元刈谷遺跡出土土版



43~45 羽沢、46 牛牧、47 八王子、48 東光寺、49 川地、50 天白  
 【43~45・47・49・50. 砂岩、46. 凝灰質砂岩、48. 軽石】

図10 有溝石錘など

ことを勘案すると、穴太遺跡例や桑飼下遺跡事例よりも後出する段階のものとも考えられ、伊勢湾岸西岸地域に岩偶岩版類が入ってきたときの様相を示しているとも考えられよう。

一方、縄文時代晩期に関して言えば、土偶と岩偶・岩版類との関連性は、後期と比べて顕著ではない。

#### d. いわゆる石錘類

縄文時代の石錘類には、打欠石錘・切目石錘・有溝石錘が知られている。最近、石錘類について言及するなかで、東海地域の縄文時代後・晩期の切目石錘・有溝石錘と報告などで言われている資料を整理し、切目・有溝1類から8類までの八群に分け、実際は多様な性格を有している遺物の集合体であるところを指摘した（川添2010a）。この中で、平面形態が円形あるいは隅丸形状を呈するもので溝が十字状に施されているものとした切目・有溝7類と、大型で溝が巡るものを一括した切目・有溝8類の一部に、今回取り上げている岩偶岩版類に類似するものがあると考えている（図9）。43・44が切目・有溝7類、45から50は切目・有溝8類に該当する。

43・44は羽沢貝塚出土例である。43は球形を呈しているものではなく、側面観に現れているように、一平面には平坦面が形成されており、断面形状はカマボコ形を呈するものである。44も同様で、一平面に平坦面が形成されており、研磨痕あるいは磨痕が認められる。沈線内には不明瞭であるが、浅い盲孔が二つ施されているようである。石材は両者とも砂岩で色調は黄褐色を呈する。また、天白遺跡で球状石製品という名称で報告されている資料もこれと同様のものであろう（森川編1995：224頁）。

切目・有溝8類と考えられる事例についても概観する。45・46は長軸方向に沈線あるいは線刻が認められるものである。45は羽沢貝塚出土例で、断面形状が円状を呈する。46は牛牧遺跡出土例で、一平面が平坦状を呈しているものである。47・48は短軸方向に沈線あるいは線刻が認められるものである。47は八王子貝塚出土例で、断面形状が扁平な長方形を呈するもので、縦方向に短沈線が施されているも

のである。48は断面形状がやや不安定ではあるが厚手のものである。49・50は平面形状が正円に近いものである。49は一平面に平坦部分が認められ、断面形状がカマボコ状を呈するものである。一周巡る沈線に対して垂直方向で端部に短沈線が認められる。50は片面に平坦面を有する扁平な形状を呈するものである。石材は、45・47・49・50が砂岩、46が凝灰質砂岩、48が軽石である。

43・44の回転穿孔と、47・49の短沈線以外は、明瞭な沈線のみで遺跡に廃棄されているといえよう。この遺物群は、岩偶岩版類と有機的関係を有していながら、細い線刻のみで廃棄されている、線刻礫とは相対する関係の資料と位置づけることができよう。

### 東海地域以外の岩偶岩版類について

#### a. 東北地域

これまでの研究主体の地域であり、岩偶・岩版といえば、東北・関東地域の、縄文時代晩期の事例を示す場合が圧倒的多数であったといえる。資料の様相およびこれまでの研究の概略は上述した研究史の方に譲るとして、ここでは、岩偶および岩版の関係、およびヴァリエーションについて、ごく簡単に触れる。

東北・関東地域は広く、様相は一つではないようである。まずは特徴的な地域として馬淵川流域がある。ここでは岩版に対して、形状が明瞭に異なる岩偶（馬淵川型岩偶）が存在する（51）。立体的な像に形成されているものであり、女性を表現しているのは明らかである<sup>\*</sup>。一方、その他の地域の岩偶といわれる資料は、形状が多様化しているようであるが、秋田県湯出野遺跡例や山形県宮の前遺跡例では、細長くかつ柱状の形状を呈した先端に、人面の装飾が施されているものもある。

小杉康が呼称したタブレットBの内容のように、関東・東北地域の岩版・土版には複数系統のものが存在しているようである（小杉1986）。同様に、稲野彰子が論じた、宮城県沼津貝塚・宮城県里浜貝塚・新潟県元屋敷遺跡・

<sup>\*</sup> 45の詳細な観察・分析結果については、別稿に掲載予定である。

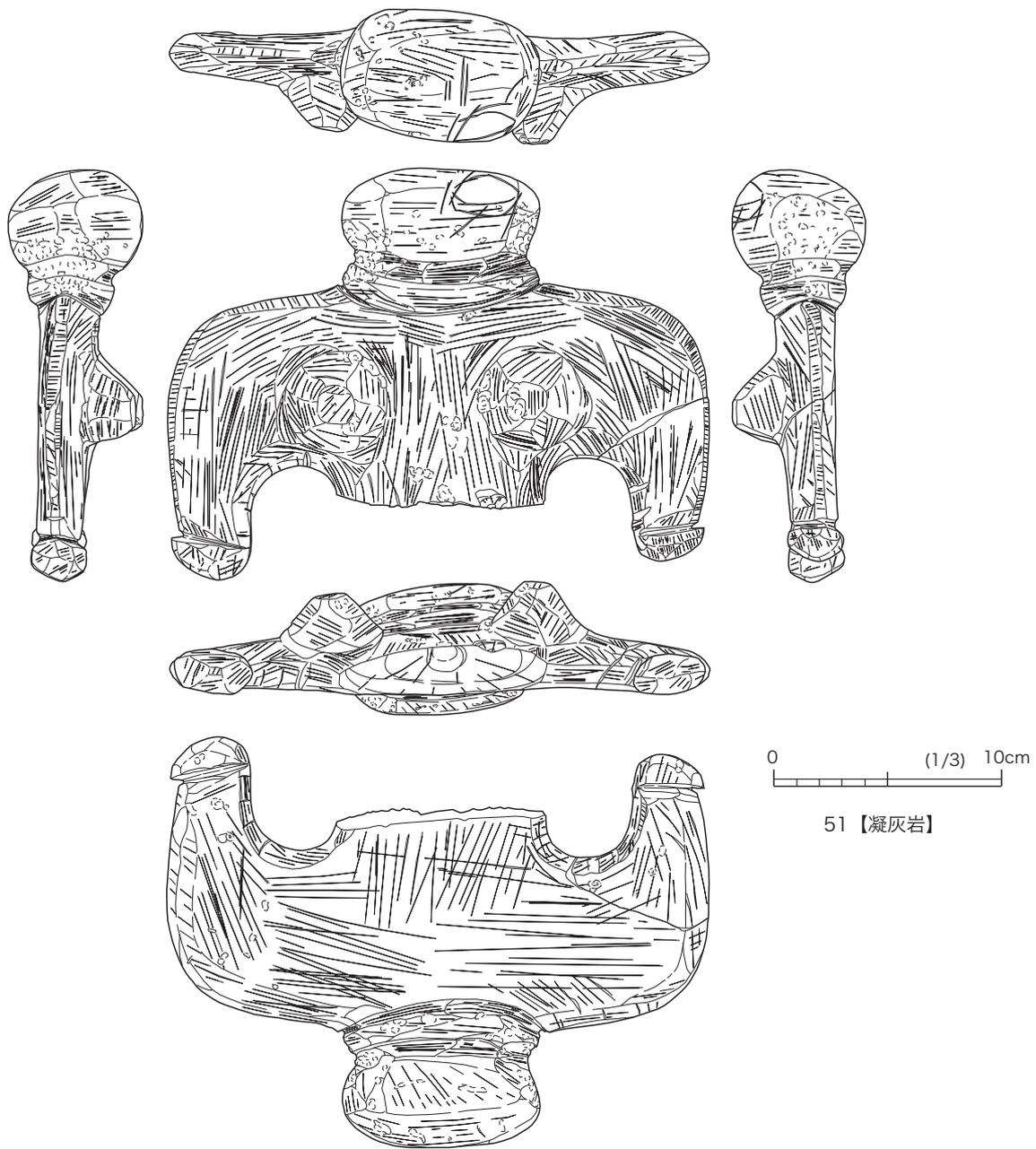


図11 鱒沢遺跡出土岩偶

富山県桜町遺跡の事例のなかで、厚みもち、身体的意匠があり打割を除いて著しい変形行為は認められない一群の存在が注目できる（稲野彰 2004）。

タブレットB類として報告された、福島県薄磯貝塚の事例の中には、パンツ形文様などを特徴とする沈線・線刻を有する事例が多数存在する（小杉 1988）。パンツ形文様自体は、馬淵型岩偶や土偶にも付されているもので、これら

との有機的関係を示すものと考えられよう。しかし、多くは器面の形状としては素材礫に近い形状のものが使用されているようで、側面から挟り入れをして人形を呈するようにしているものは若干である。また、正中線は連続した円文様に貫くものなどに認められ、パンツ形文様に付されているものにはほとんど認められないようである。

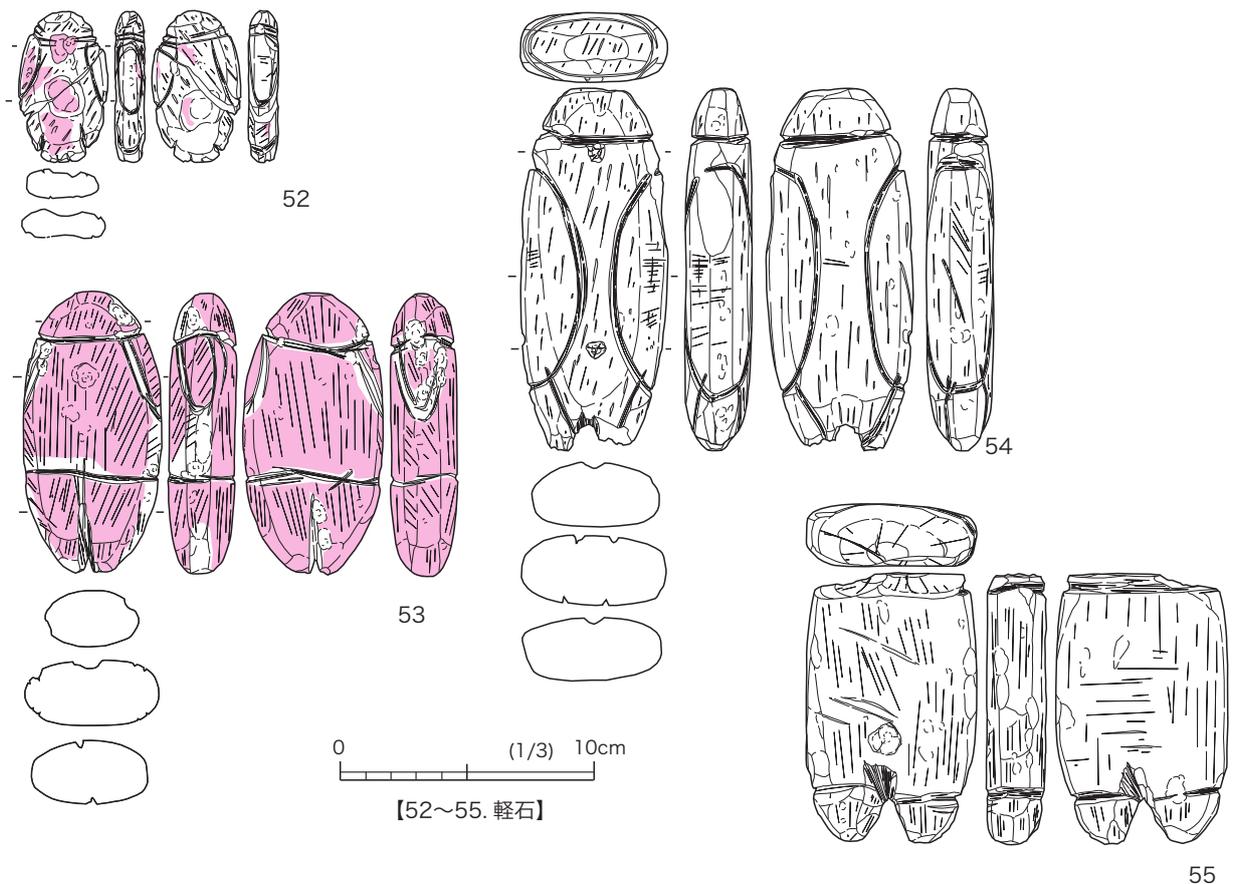


図12 柘原遺跡出土 岩偶岩版類

### b. 上越・北陸地域

この地域の資料については、上述した大野淳也の論考を参考に概観する（大野 2007）。富山県桜町遺跡では、近年 14 点もの岩偶・岩版類が出土しており、その報告と分析が行なわれた。この一群の資料の特徴は、盲孔は 14 点中 8 点と広く認められるものの、盲孔のある面での正中線の認められるものが 1 点と少ないばかりか、対向する弧線はいずれにも確認できない。また、板状のものばかりではなく、厚みのある卵形の断面形状を有する資料が 1 点確認できている。この資料は、頭部に横方向の沈線が集中して認められ、表裏の上部と頭頂部に背反する弧線の内部を彫去した連結三叉文が施されているものである。

他の遺跡事例では、平面形状楕円形の器形に、盲孔や直線的な沈線あるいは線刻が施されている事例が多いようである。その中で、平面形状がヒサゴ形を呈する、石川県酒見新堂遺跡の事例と新潟県寺地遺跡の事例は、東海地域の

板状 C-3 類との関連で注目すべき資料と考えられる。いずれも横方向に展開する三叉状の沈線・線刻があり、それが重層化して存在している。上面端部にも文様が認められる点も共通するようである。

### c. 南九州地域

南九州地域では、軽石製の岩偶が存在していることが知られている（図 12）。上加世田遺跡例に加え、近年の鹿児島県垂水市柘原貝塚では多量の軽石製品が出土しており、その中に岩偶が 64 点含まれている。柘原貝塚の岩偶といわれている資料は、器形全体の平面形状が長楕円形を、断面形状が長楕円形あるいは隅丸長方形を呈し、本稿でいうところの板状を呈するものが主体で、断面形状が円形に近い楕円形状を呈する、非板状のものはごく若干である。沈線は、上端部には横方向および器形上部あるいは中央部付近には対向する弧線および斜沈線が認められるものが多数を占め、器面中央上部ある

いは上部と下部に敲打などによる盲孔が認められる。さらに赤彩が施されている事例が多見でき、52については理科学的分析の結果、ベンガラであることが報告されている（鶴飼・羽生1999）<sup>\*</sup>。53では、さらに側面部を中心にアバタ状の敲打痕が認められる。岩偶には完存していない資料も多くはないものの存在しており、小型で薄手のものでは破損状況が不明瞭であるが、55など大型で肉厚のものについては打割などの行為が行なわれた可能性も考えられる。

これら岩偶とする資料については、近年、寒川朋枝による分析がある（寒川2002など）。岩偶と石棒との区別が難しいものの存在など、これまでの成果を確認しつつ、表裏面の沈線の存在とサイズなどから、手にもって使用する岩偶の存在を指摘した（同：174頁）。もし上述した敲打痕の観察が適正であるならば、この手にもつ行為の延長に敲打による改変行為があったものとも考えられる。

## まとめ

以上、東海地域の岩偶岩版類について検討をし、加えて関連資料についても簡単に触れた。ここで再度、東海地域の岩偶岩版類に戻って、その意義について私見を述べる（図13）。

岩偶岩版類を検討する上で、同時に検討すべき資料に線刻礫と石錘類の一部がある。線刻礫は、この線刻自体で人形の表現を行なっているものと、表現対象物是不詳なものがあるが、特に後者の場合に線刻礫と呼称される場合が多い。また、石錘類はいわゆる有溝石錘といわれているものの一部に、岩偶岩版類と有機的関係を有していると考えられるものがある。これら三者をまとめて広義の岩偶岩版類とした場合、ここでこれまで取り上げてきた岩偶岩版類を、狭義の岩偶岩版類とすることができる。但し、線刻礫および関連のある有溝石錘は、東海地域の中では若干数であるため、以下の文では狭義の岩偶岩版類を、単に岩偶岩版類と呼称する。

<sup>\*</sup> 47の赤彩については、鉄分の付着とも考えられるものの、可能性を重視して赤彩表現を行なった。報告では、局所的な残存と記録されている。

岩偶岩版類は資料数33点に対して、提示した分類は、計17類型にも及び、形状のヴァリエーションは多様であるといえる。また、出土している19遺跡中、15遺跡では一遺跡から1点のみの出土と、単発的な出土傾向を示す場合が多いのも特徴として挙げられる。

当地域に、石製の人形としての岩偶岩版類が認められるのは、縄文時代後期中葉以降と考えられ、縄文時代後期の事例としては、天白遺跡・下沖遺跡・佐八藤波遺跡・片野殿垣内遺跡・穴太遺跡・桑飼下遺跡の事例が該当し、中村遺跡・久須田遺跡の事例もその可能性が考えられるもので、伊勢湾岸西部以西に多く認められる。板状A類が多く、非板状もこの時期である。

本分類の板状B-3類は、東北地域などからの後期岩版類の影響があったとはいえ、形状的な由来は分銅形土偶からの素材転化が契機かもしれない。但し、35の下半線刻のような線刻は分銅形土偶には認められないものであり、単なる土偶の代わりではなく、石製品ならではの役割が存在していたものと考えられる。

佐八藤波遺跡の非板状C-3類（32）は、現状では東海地域の資料には類似が見当たらないといえる。但し、部分的な要素をつなぎ合わせると、既に大野が指摘しているように南九州域の岩偶といわれる一群に最も近い。頭部・胴部との境に沈線を配置し、また脚部付根部分に沈線を配置するのは49に類似するものであり、かつ頭部の側面側に飛び出す凸状の形成は、鹿児島県上加世田遺跡の動物岩偶といわれている資料に類似する。また、肩部からの斜方向の沈線が表裏面に展開することも、南九州域の資料と大いに共通する点である。しかし、南九州域の資料は軽石製であり、佐八藤波遺跡での結晶片岩製と使用石材が異なることと、斜方向に太い沈線が施されているという点からも、南九州域の岩偶岩版類そのものが直接持ち込まれた訳ではない。

一方、縄文時代晩期の事例は、伊勢湾岸東部に多く認められる。後期との関連で注目できる事例としては、板状C-2類・C-3類の存在で、板状B-3類の系譜を引くものと考えられる。このような変遷が、分銅形土偶との極めて有機的関係を示しながらも、石川県酒見新堂遺跡や新

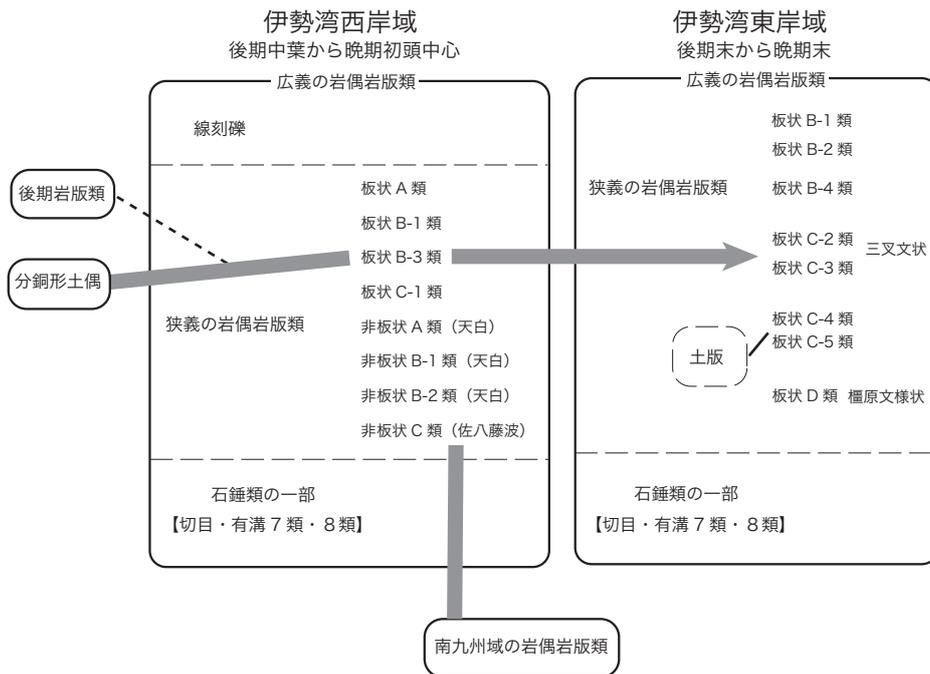


図 13 東海地域における岩偶岩版類の変遷

瀧県寺地遺跡の事例と同様に、後期後半から晩期にかけて石製の人形として独自の展開を果たした様子を窺うことができるかもしれない。また、板状 B-1 類・板状 B-2 類のような正中線・対向する弧線を有する資料が存在する一方で、板状 C-2 類・C-3 類のように板状 B-3 類の系統を引くと考えられる資料の存在と、横沈線を主体とする板状 C-4・C-5 類の存在・さらに板状 D 類という、いわば東日本域には見られない様相を呈するものが多く認められる。1・7・9 などの平面形状・沈線の多条化・正中線の不存在など、当地域の岩偶岩版類の特徴として挙げる事ができよう。これらも広い視点では南九州域の岩偶岩版類に個別部分的に類似する要素を挙げる事ができるものの、最大の相違点としては盲孔の不存在である。32 の佐八藤波遺跡事例の段階から、5・6 に認められる X 字状の文様の存在など、東海地域の特徴が表出した状態とも説明できるかもしれない。

また、これらの遺物が祭祀行為に使用されたとするならば、最終的に打割状態で出土する資料と、完存状態で出土する資料との差異が大きな視点となることも考えられる。板状 B-1 類・B-3 類・C-1 類・C-2 類・C-3 類が打割状態での廃棄行為が確認できたものであるが、この類

型の全資料に打割が行われた訳ではないことにも注意すべきであろう。

## 今後の課題

今回、岩偶岩版類に関して、東海地域の資料紹介を行ない、若干の考察を行なった。しかし、具体的に行なわれた祭祀行為についての言及を行なう状況にはまだ至っていないので、これに関しては大きな課題としたい。これには、各類型の岩偶岩版類が表出している人形の性格を特定する必要がある。大きくは、(1) 女性、(2) 男性、(3) 両性、(4) 性の区別なし、の四種が考えられるが、列島内の類例を概観するだけでも、すべての資料が同一の性格を有していないと考えられることは明らかである。

本稿では、これまで研究の主体であった東北地域・関東地域の岩偶岩版類との関係が不明瞭なままに検討を終えざるを得なかった。これは、筆者が特に岩版やその類例資料について調査が不十分であったことに起因する。この点はきわめて反省すべき点であり、今後、早急に善処したい。

また、遠隔地地域との関係については、佐八藤波遺跡事例のように南九州域との関係について

もさらなる検討が必要である。柘原貝塚で多量に出土している軽石製品の中の、船形と円盤形と言われているものに類似する資料が、1点ずつではあるが天白遺跡でも報告されている。天白遺跡の事例は、当遺跡の岩偶岩版類に使われたのと同様な砂岩である。伊勢地域と南九州地域を直接結ぶというものかもしれないし、西日本一帯に点在する資料なのかもしれない。

## 謝辞

本稿を草するにあたり、以下の方、および機関からご教示および便宜を図って頂いた。ここに感謝の意を表する次第である。

石黒立人・鶴飼堅証・大塚達朗・大野淳也・長田友也・田村陽一・永井宏幸・中村健二・羽生文彦・豆谷和之・山崎純男

愛知県教育委員会・伊勢市教育委員会・岡崎市教育委員会・海津市教育委員会・可児市教育委員会・刈谷市教育委員会・滋賀県教育委員会・田原市教育委員会・垂水市教育委員会・豊川市教育委員会・中津川市教育委員会・南山大学人類学博物館・西尾市教育委員会・浜松市教育委員会・舞鶴市教育委員会・松坂市教育委員会・三重県教育委員会・美濃加茂市教育委員会

## 参考文献

- 天羽利夫,1964「亀ヶ岡文化における土版・岩版の研究」『史学』37-4.77～96頁。三田史学会。
- 池上啓介,1933「土版岩版の研究「特に土版岩版の形式及び分布状態に就て」」『上代文化』10.42～54頁。上代文化研究会。
- 磯前順一・斎藤和子,1999「遺物研究 岩版・土版—形式・意味・構造—」『縄文時代』10(第4分冊).147～155頁。縄文時代文化研究会。
- 稲野彰子,1982「関東地方における岩版・土版の文様」『史学』52-2.159～170頁。三田史学会。
- 稲野彰子,1983a「岩版」『縄文文化の研究』9.102～113頁。東京 雄山閣。
- 稲野彰子,1983b「岩版・土版出土遺跡—東北・関東地方—」『考古遺跡遺物地名表』408～414頁。東京 柏書房。
- 稲野彰子,2004「岩版の周辺」『時空をこえた対話—三田の考古学—』103～108頁。慶應義塾大学文学部民族学考古学研究室。
- 稲野彰子,2005「馬淵川流域における岩版・土版第1類と第2類—身体意匠に注目して—」『北上市立博物館研究報告』15.1～8頁。北上市立博物館。
- 稲野裕介,1983「岩偶」『縄文文化の研究』9.86～94頁。東京 雄山閣。
- 稲野裕介,1998「亀ヶ岡文化における岩偶(1)」『列島の考古学』69～78頁。渡辺誠先生選集記念論集刊行会。
- 稲野裕介,1999「亀ヶ岡文化における岩偶(2)」『土偶研究の地平「土偶とその情報」研究論集』3.389～400頁。東京 勉誠出版。
- 稲野裕介,1999「遺物研究 岩偶」『縄文時代』10(第4分冊).139～146頁。縄文時代文化研究会。
- 稲野裕介,2004「岩版と岩偶の「岩」の用字について」『時空をこえた対話—三田の考古学—』97～102頁。慶應義塾大学文学部民族学考古学研究室。
- 稲野裕介,2007「岩偶(晩期)」『縄文時代の考古学』11.55～60頁。東京 同成社。
- 江坂輝彌,1960『土偶』東京 校倉書房。
- 大野淳也,2007「北陸地方における岩版類について—桜町遺跡出土品を中心として—」『桜町遺跡発掘調査報告書 縄文時代総括編』219～264頁。小矢部市教育委員会。
- 大野延太郎,1897「土版と土偶の関係」『東京人類学会雑誌』12-131.201～204頁。東京人類学会。
- 大野延太郎,1898「岩盤も土偶に関係あり」『東京人類学会雑誌』13-144.235～236頁。東京人類学会。
- 大野延太郎,1900「石製人形及び石製模造品」『東京人類学会雑誌』15-171.351～355頁。東京人類学会。
- 大野延太郎,1901「石器時代土偶系統品と模様の変化に就て」『東京人類学会雑誌』16-184.411～413頁。東京人類学会。
- 大野延太郎,1918「土版・石版の形式分類」『人性』14-9.489～496頁。裳華房。
- 長田友也,2004「新潟県アチャ平遺跡出土の線刻礫(岩版)についての考察」『三面川流域の考古学』3.1～34頁。

## 資料の所在

1. 浜松市教育委員会、2・3. 中津川市教育委員会、4. 美濃加茂市教育委員会、5・6. 可児市教育委員会、7・10・11・46・48. 愛知県教育委員会、8・42. 刈谷市教育委員会、9. 岡崎市教育委員会、12～14. 豊川市教育委員会、15・51. 南山大学人類学博物館、16・17・49. 田原市教育委員会、18～28・36～40・50. 三重県教育委員会、29・30. 松坂市教育委員会、31. 田村・大下 2001より引用、32・33. 伊勢市教育委員会、34. 滋賀県教育委員会、35. 舞鶴市教育委員会、43～45. 海津市教育委員会、47. 西尾市教育委員会、52～55. 垂水市教育委員会

## 追記

脱稿後に、名古屋市玉ノ井遺跡出土資料を実見した。白色を呈する砂岩製で、断面形状は厚みのある方形状である。両側辺には切目状の加工が施されているもので、これも岩偶岩版類に関連する資料と位置づけられよう(頼瀬 2003:96頁32)。晩期前半の資料である。

- 長田友也,2007「後期岩版類」『縄文時代の考古学』11.126～131頁。東京 同成社。
- 金子昭彦,2001『遮光器土偶と縄文社会』東京 同成社。
- 河口貞徳,1973「上加世田遺跡第6次」『鹿兒島考古』7。
- 川添和暁,2010a「縄文時代の石錘類について—豊田市今朝平遺跡出土資料の分析を中心に—」『豊田市史研究』1.103～130頁。豊田市。
- 川添和暁,2010b「貝層形成の見られない遺跡における形成過程について—東海地域の縄文時代晩期を中心に—」『南山大学人類学博物館オープンリサーチセンター2009年次報告書付編研究会・シンポジウム資料』南山大学人類学博物館。
- 綱編 茂編,2003『埋蔵文化財調査報告書 44 玉ノ井遺跡 (第3・4次)』名古屋市教育委員会。
- 小杉 康,1986「千葉県江原台遺跡及び岩手県雨滝遺跡出土の亀形土製品—所謂亀形土製品、土版、岩版の型式学的研究と用途問題—」『明治大学考古学博物館館報』2.51～71頁。明治大学考古学博物館。
- 小杉 康,1988「石製タブレットB群」『薄磯貝塚』232～287頁。いわき市教育委員会。
- 小林達雄,1967「縄文晩期における土版・岩版—研究の前提」『物質文化』10.1～8頁。物質文化研究会。
- 斎藤和子,2001「岩版・土版の身体表現について—土偶との関わりから—」『人類学雑誌』108.2.61～79頁。日本人類学会。
- 佐藤伝蔵,1897「共同備忘録 (五)」『東京人類学会雑誌』12.138.487頁。東京人類学会。
- 寒川朋枝,2001「南九州の軽石製岩偶」『縄文・弥生移行期の石製呪術具』3.29～47頁。国立歴史民俗博物館春成秀爾研究室。
- 寒川朋枝,2002「祭祀行為についての検討」『人類史研究』13.163～175頁。人類史研究会。
- 鈴木克彦,1980「岩版・土版の研究序説—風韻堂コレクション資料編—」『調査研究年報 (1979年度)』5.67～128頁。青森県立郷土館。
- 鈴木克彦,2005「石偶に関する研究」『北奥の考古学』葛西勲先生還暦記念論文集刊行会。
- 須藤 隆,1974「青森県二枚橋遺跡出土の打製石偶について」『日本考古学・古代史論集』89～118頁。伊東信男教授還暦記念会。
- 芹沢長介,1960『石器時代の日本』東京 築地書館。
- 鷹野光行,1977「関東地方の土版の分類について」『古代文化』29.10.43～49頁。財団法人 古代学協会。
- 鳥居龍藏,1922「日本石器時代民衆の女神信仰」『人類学雑誌』37.11.371～383頁。東京人類学会。
- 鳥居龍藏・内山九三郎,1893「武蔵国荏原郡調布田下沼部貝塚」『東京人類学会雑誌』8.86.299～308頁。東京人類学会。
- 中村健二,2000「近畿地方における縄文時代後期土偶の成立と展開」『土偶研究の地平「土偶とその情報」研究論集』4.169～194頁。東京 勉誠出版。
- 中谷治宇二郎,1943『日本石器時代提要』東京 甲鳥書店。
- 山崎五十磨,1920「大關国福山村石器時代遺跡より発見したる石偶に就て」『考古学雑誌』106.334～338頁。考古学会。
- 横山勝栄,1980「新潟北部における土版・岩版の存在とその意義—地域性考察ひとつの視点—」『考古風土記』5.167～176頁。青森 (鈴木克彦)。
- 米田耕之助,1983「土版—研究動向」『縄文文化の研究』9.95～101頁。東京 雄山閣。
- 渡辺 誠編,1997『青森県石亀遺跡における亀ヶ岡文化の研究』財団法人 古代学協会。
- Edward S. Morse,1879 SHELL MOUNDS OF OMORI

## 報告書など

- 渥美町郷土資料館,1997『渥美半島の縄文文化』
- 岩中淳之,1991『佐八藤波遺跡発掘調査報告』伊勢市教育委員会。
- 大江まさる・紅村 弘,1973『北裏遺跡』可児町北裏遺跡発掘調査団。
- 加藤安信編,1993『東光寺遺跡』愛知県埋蔵文化財センター。
- 加藤岩藏・齋藤嘉彦ほか,1972『本刈谷貝塚』刈谷市教育委員会。
- 川添和暁編,2001『牛牧遺跡』愛知県埋蔵文化財センター。
- 河野典夫ほか,1991『久須田遺跡発掘調査報告書』中津川市教育委員会。
- 小林知生ほか,1966『保美貝塚』渥美町教育委員会。
- 齋藤基生・藤村 俊,2002『尾崎遺跡発掘調査報告書』美濃加茂市教育委員会。
- 齋藤嘉彦ほか,1968『中条貝塚』刈谷市教員委員会。
- 齋藤嘉彦,2001『国指定遺跡 真宮遺跡』岡崎市教育委員会。
- 鈴木敏則編,1992『佐鳴湖西岸遺跡 (本文編 II)』財団法人浜松市文化協会。
- 田村陽一・大下 明,2001『片野殿垣内遺跡発掘調査報告書』勢和村教育委員会。
- 仲川 靖編,1997『穴太遺跡発掘調査報告書 II』滋賀県教育委員会。
- 中田良三・篠原英政・住田誠行,1979『中村遺跡』中津川市教育委員会。
- 久永春男ほか,1972『伊川津貝塚』渥美町教育委員会。
- 前田清彦編,1993『麻生田大橋遺跡発掘調査報告書』豊川市教育委員会。
- 森川幸雄,1995『天白遺跡』三重県埋蔵文化財センター。
- 宮石宗弘,1957『大坪遺跡』山口遺跡調査保存会。
- 安井俊則編,1991『麻生田大橋』愛知県埋蔵文化財センター。
- 和氣清章,2000『下沖遺跡発掘調査報告』娯野町教育委員会。
- 渡辺 誠編,1975『桑飼下遺跡発掘調査報告書』平安博物館。